

爆弾が落ちたとされる場所

多くの方々に
船佐空襲のことを
知ってもらいたい——



築地 昭二さん (79歳・高宮町)

戦時により、親を失う子
がいます。戦争は、私
たち市民の生活をめちゃくちゃ
にします。

両岸に3発ずつ、計6発がほぼ
2〜300mの間隔で投下され
ました。爆弾投下の要因は、近
くにあった水路(堰堤)が発電
所を狙ったという説や、飛来し
たB29は写真偵察または気象偵
察が目的で、その帰りに爆弾を
落として帰ったという説、5月
5日同日にあった呉市の広にあ
る軍隊直属軍需工場への空襲に
行った一機が単機で行動したと
いう説があります。

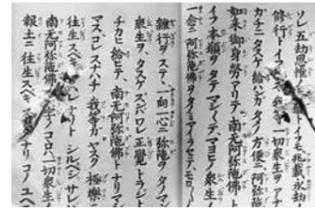
アメリカ軍機による県内の空
襲は、広島原爆までに45回あ
りました。爆撃は、広島・呉・
福山に集中しており、中国山地
では船佐が唯一の被災地となり
ました。

「8月6日に原爆が落ちたと
いうことは、広島に住む人間な
らよく知っていますが、高宮町
でこのような爆撃があったとい
うことは、地元でもあまり知ら
れていません」と
と言うのは、船佐空襲を調べ、
小学校の総合的な学習の授業
で、平和学習の先生も務めてい
る築地昭二さん。少しずつ調
査を進め、空襲の事実を伝えて
います。

戦争により親を失う子がい
る。尚一さんの息子 中森五郎さんから
当時の私は海軍に所属してい
ました。5月に、東シナ海方面
から佐賀県の唐津基地に戻った
時、いつもきていた便りが1つ
もなかった。おじさんに家
族に何かあったのかと便りを出
したら、みんな爆撃で亡くなっ
てしまった、と知らされました。
そのときは、すぐ家に帰ること
は叶わず、終戦まで家に帰りま
せんでした。広島に帰ってみる
と一面焼野原でしたが、芸備線
に乗ってみると、日常の風景が
広がっていました。ひよっとし
たら、家族みんな元気でいるの
ではないかと思いましたが、
帰ると、家族が亡くなった現実
を聞かされました。一時は死を
覚悟しましたが、自分が立ち直
らなかつたらいけないんだ、と
思って、こつこつと、何もなかつ
た状態から頑張ってきました。
外国の戦争をテレビで見るた
びに、戦争により、親を失う子
がいます。戦争は、私
たち市民の生活をめちゃくちゃ
にします。



空襲の事実を記す看板の前で説明をする
中森さん(左)と築地さん(右)



(上から) 爆撃でページが破れた『御文章』と爆弾の破片



米軍爆撃機「B29」
所蔵：米国立公文書館 提供：工藤 洋三

山間の地域に 落とされた6発の爆弾

1945(昭和20)年、5月
5日朝5時40分。米軍爆撃機「B
29」1機が飛来し、落とされた6
発の爆弾のうちの1つが中森
尚一さん宅前庭を直撃。母屋・
納屋を焼失し、当日たまたま里
帰りをしていた長女と孫娘を含
む家族7名がその犠牲となりま
した。

「当時は、『飛行機が飛ぶブーン
という音が聞こえたら手で耳を
ふさいで腹を地につけなさい』
と習っていたから、B29が飛来
してきたときはそうしてしまし
た。おじさん(中森尚一さん)
が『飛行機が通りよるで、きよ
るで』と言っていたのを覚えて
います。そして、ガラガラとい
う大きな音の後に、ドカーンと
いう猛烈な音がして、見てみる
と、家は跡形もなく、周囲は火
の海でした。そして、おじさん
やおばさんが、家の周囲に倒れ
ていました。みんな、ほぼ即死
でした」
と語るのは、当時、爆撃を受け
た中森宅の隣に住んでいた中森
松夫さん。「火葬場が近くにあり、
そこにご遺体を並べて、木
を叩き割って積んで、藁をかけ
て、火をつけました。その際は、
お坊さん呼んで、お経をあげ
ることはできませんでした」



中森 松夫さん (83歳・高宮町)

家は跡形もなく、
周囲は火の海でした——

知られざる 船佐空襲

—犠牲になった 7名の尊い命—

1945(昭和20)年5月5日。終戦の年。山あいの地域に、米軍爆撃機「B29」から、6発の爆弾が落とされ、その1つが民家に直撃し、7名もの尊い命が失われました。